

マッセ・市民セミナー
(NPO法人ちゃいんどネット大阪共催)

**「保護者の状況にそった支援のあり方
～これからの保育・教育をふまえて～」**

開催日：平成28年8月3日（水）

会 場：寝屋川市立市民会館 小ホール



ちゃいるどネット大阪・マッセOSAKAコラボ研修（河北ブロック）

「保護者の状況にそった支援のあり方

～これからの保育・教育をふまえて～

大方 美香 氏
(大阪総合保育大学教授)

1. はじめに

今日は、保護者についてと保育の動向についての二つのテーマを頂いています。まず、保育所保育指針の改定が始まっていて、昨日（8月2日）で中間とりまとめが発表されました。また、小学校以上の教育課程においても平成30年度を目指して教育改革が始まっており、私たち大学も免許を出す立場として問われている時代になっています。

認定こども園についても教育・保育要領が出されて間もないですが、幼稚園型と保育所型と認定こども園のあり方がばらばらなので、うまく一致させていく部分と同じではない部分の住み分けをするための議論が行われています。その中で保護者のことを考えたときに、幼稚園型の場合も、保育所型の場合も、こども園の場合も、それから未就園の方々も含めて、あらゆるところで課題になっていることがあるので、それを踏まえた話をしたいと思います。

後半では、制度の問題は別にして、就学前の人間教育としてどういうことが大事かということについて考えます。一体何を育てるために日々の遊びや活動をしているのかをもう一度考え直すときになっていると思います。それは今までしてきたことがいいとか悪いということではなく、今の時代に子どもたちの生活から失われているもの、失ってはいけないもの、時代が変わっても人として当然育てておかなければならないことを考えなければなりません。

その背景には、子どもが変わったという前に、大人社会が変わったということがあってと思います。大人の環境が変わったことによって、結果として子どもの環境が変わり、子どもの育ちそのものが変わってきている面があります。保護者自身を取り巻く社会全体のあり方も変わってきた中で、就労のあり方も含めて変わっている部分がありますので、大きな点から日々の生活に至るところまで影響を考えてみたいと思います。私も試行錯誤しているところなので、皆

さんと共に考えていきたいと思います。

2. 保護者の何を支援するのか

まず、保護者の何を支援するのかという大きなテーマを考えなければならぬと思います。これが介護であれば、支援計画がきちんとして、介護保険制度もあるので、いい悪いは別にして、ある程度整理されてきました。しかし、介護保険制度ができたときは非常に賛否両論があり、それまで気持ちとしてできたことが、介護保険が適用されたり、要介護度が決められたりすることで、「限定されたらハートの部分でケアできないよね」という面もありました。

子どもは良くも悪くも未整理の状態、保護者支援という言葉ではくくられていますが、どこからどこまでが保育の場でケアすることなのか、関係機関との連携といっても何を連携するのかということを整理していかなければならない時代だと思いますし、何でもかんでも担任や保育園ができるわけではありません。そこで、私たちが行うのはどの部分かということと、何を連携するのかという整理を前提としてイメージしていきたいと思います。

その前に、大人社会は何が変わったかということについて考えなければなりません。これから皆さんにじゃんけんをしていただいて、勝った人から1分だけ自己紹介をしてください。皆さん自身にとって、この5～10年で自分の子ども時代と何が変わったかを、自己紹介の後で話してみてください。

—対話—

1分ですが、それなりに話せると思います。保育は忙しいので、研修は大抵、午後6時ごろから始まり、職員会議は全員が揃うことは難しいです。ですから、引き継ぎ前の1分や職員会議が始まる前の1分、昼寝前の1分を使って問題意識を持ってほしいわけです。大きな話として考えるのではなくて、生活型の保育であるからこそ、最近何か変わったことがあるかどうか、例えばAちゃんのお母さんのことであったとしても、一人で悩まずに、職員会議で他の先生が情報を持っているかどうか、1分だけ時間をもらって教えてもらったり、具体的に何ができるかを考えていかないと、いくらこうして研修を受けたとしても、実践に役立たなければもったいないし、保育は何も変わりません。



先生が一人で疲弊してしまうことが多いし、話そうと思っても保育中にどのタイミングで声を掛けていいのか分かりません。今日はリーダーばかりが来ているわけではないですが、園の中である程度、昼寝前の1分だけでもとにかく話すようにしましょう。声を出すだけでも随分すっきりしますし、午前中あったことで報告しなければならないことがあれば、その1分の時間に聞くようなルールでもいいし、特に1年目の先生や新しいパートさんの方がいれば、昼寝前の1分だけ時間を取って、質問の時間を取るなど、何でもいいので、具体化してはどうかと私は思っています。これは一つの提案です。

教育改革で一番変わったことの一つは、今のように対話することです。就学前から大学まで全てがアクティブラーニングという言い方をしますが、対話する時間を持つことが学校教育として求められています。そうすると、保育は生活する場として、子どもたちにとって話すこととはどういうことかという課題があるとともに、大人は今のようにしゃべっているかという課題がセットとしてあります。保育の人はしゃべることが仕事なので、しゃべっていないとは思いますが、保護者の方々は限りなくしゃべる率が減っています。

3. 大人社会の変化、子どもの生活の変化

特に保護者の支援を考えると、とても深刻でかなり重い支援をしなければならない人について考える場合と、一般的な保護者への支援を考える場合の両方の課題があります。まず、全体としてしんどくなっていることを知り、さらにその中で、よりしんどい人のことを考えます。今の時代、一人だけがしんどかったり、気になる人だけがしんどかったりするのではなく、みんながしんどいと思った方がいいです。特に長時間利用される保護者は、何らかの背景や理由があって、保育所を利用しているわけです。何もなくて保育所に入っているわけではないので、外から見れば何もないように見えたとしても、何らかの形でしんどいのです。安心していい人は、一人もいません。

さらに言えば、国を挙げて子育ての支援をしなければならない時代であるということは、自分で育てるのがしんどい時代だということです。いい悪いという問題ではなく、なぜ子どもを育てることがしんどくなってしまったのかを考えることが、まずは大事な視点になると思います。

特に2008年の指針からは、クラスの保育と同時並行して保護者支援も入り、

さらに子育て支援の形で社会全体で育てることになっていて、あらゆる働き方に対する支援になっています。今回の制度改革は多様なあらゆる働き方がポイントです。ですから、あらゆる支援を私たちは考えなければなりません。どんなタイプの方であっても支援する前提で今回の制度改革がありますから、その辺は少し頭を切り替えなければならないと思ってください。

ソーシャルネットワークの時代になり、声を出してしゃべることがなくなりました。あらゆる情報がネットの中にあり、ボタン一つで飛行機の切符も買えるし、ホテルも予約できるし、地図は出てくるし、何でも調べればすぐに手に入ります。一方で、家の中でしゃべったり、人としゃべったりする関係がなくなってきました。家族であったとしても、恋人であったとしてもそうです。

私どもの学生もそうですが、隣に座っていても、お互いに「LINEを送ったから見て」となります。一緒にいるならしゃべった方が早いのですが、LINEがやりとりのツールになっています。皆さんもそうかもしれませんが、今までなら電話を使って「今日は遅くなるからね」「ご飯は要らない」と伝えていました。相手がそこにいて、良くも悪くも気を使ったり、その声を聞いて「今日は機嫌が悪いな」と感じるような関係があったわけです。

今はそれが合理化されたので、とても便利です。相手の気持ちを考えなくても、「遅い」と言えばそれで終わります。「今日はご飯は要らないよ」と言えば、それで終わります。2階と1階にいたとしても、「ご飯よ」「はい」というような家の中での関係もなくなっているかもしれません。

井戸端会議といわれるようなことも今ではなくなり、長電話も多分どんどんなくなっています。ガラケーと呼ばれる携帯の時代はまだしゃべっていたのですが、LINE、Facebookになると、指先で済むようになっていきます。高校のときから既にソーシャルネットワークがあった時代の人が今では大人になっています。

つまり、皆さんの時代は対話する時代があって、今のようにおしゃべりして情報を確認したり、聞いてもらったりする時代があって、大人になって便利になったわけです。しかし、今の保護者は初めからLINEなどのソーシャルネットワークの時代に学生時代を過ごして親になっています。ここにかなりのギャップがあります。ですから、相手の保護者は皆さんが思う以上に、言語で対話したり、気持ちのやりとりをすることに、全員とは言いませんが、限りなく難しくなっ



ているかもしれません。

そうすると、先生方が一生懸命しゃべろうと思って相手を追いかけても、何をしゃべっていいか分かりません。気持ちを言語化することに慣れていないのです。音は聞こえていて、しゃべっていることは分かっているのですが、言葉を聞いてイメージして、先生が自分に何を言おうとしているのかを察しなければならぬので、先生の日本語は何を言っているのか意味が分かりません。

特に、保育者は遠回しに言います。単刀直入ではなく、時系列でしゃべります。朝からずっと順番に話しながら、この話はどこまで続くのかなと思って聞いていると、最後にはけんかの話だったという感じで、「今日はけんかをした」という結論が先に来る説明ではないのです。それがいい悪いではありません。

—対話—

それなりに慣れてくれば、30秒でも思いを伝え合うことができます。ある程度目的意識を持ってしゃべれば、それなりに課題を共有できるので、ぜひ意識してほしいと思います。

今しゃべっていただいて分かるように、保護者と接するのはほとんどが朝と夜です。ということは、最も疲れている時間、最も急いでいる時間に出会っているわけです。皆さんは仕事なので、「今日こそはつかまえてしゃべるぞ」と待ち構えますが、送り迎えする保護者は、子どもを置いて早く仕事に行こう、子どもを連れて早く家に帰ろうと思っています。あるいは、疲れているので、仕事のことや嫌なことを引きずっていたり、早く帰って残業しなければならなかったり、早く帰ってお兄ちゃんの宿題を見なければならなかったり、いろいろな気持ちを持ちながら来ています。

私たちにすれば、これだけ昼間に預けているのだから、迎えに来たときぐらいいは立ち止まって、「ありがとう」「ただいま」などと何か言ってくれたらいいのにとします。それは決して間違っているわけではありませんが、長時間・長期間になればなるほど、疲れた人が迎えに来ています。そのときに対話するには、1分間で伝えることに慣れておかないと、思いがあればあるほど長くなり、引き止められると思えば思うほど、どんなにすてきな支援も拒否されてしまいます。通じる前に避けられたり、結果的に支援に結びつかなかったり、誤

解されたりします。

「なぜ私ばかり声を掛けるのよ。放っておいて」と言われれば、効果が上がらないので、子どもにも良くありません。本当に伝えなければならない正しいことも伝わらないのです。キッチンタイマーを使って測ってもいいと思うのですが、特にしゃべらなければならないお母さんには1分に限定して、最初は1分で話をやめるのです。それぐらい具体的な支援を考えなければならないと思います。

どうせ保育者は長くなるに違いないと思っている保護者がほとんどです。だから、「お母さん、途中だけどやめるわ」と言えば、「もうちょっとしゃべっていいよ」と言われる場合もあるし、「よかった。1分で終わった。本当に先生は約束を守ってくれるのだな」と言ってもらえる場合もあります。そういう関係を普段から作っておき、必要なことがあれば、「話したいことがあるので、お母さんはいつがいい?」、「いつもは1分だけの約束だけど、時間があるときに話したいから、何日だったらいい? そのときは20分ちょうだいね」というふうに、対話する場面をどう作るかがとても大事です。

今の保護者のほとんどはネットの中で情報を持っていますが、その情報が子どもに合っているかどうかという判断が抜けています。同じ年齢の〇〇ちゃんはこちらだ、〇〇保育園ではこんなことをしてくれるらしいという情報はたくさん持っていますが、自分の家には何が大事か、何が抜けているのか、その人に必要な支援の情報は意外と選べません。判断基準を持っていない保護者がとても多いのです。情報が余計にあふれているが故に、情報に疲れてしまったり、非常に独りよがりな情報を取ったりしている場合があります。

これだけネットでLINEやメールをしている割には、少ししゃべったら自分の気持ちがほっとしたり、自分の意見を言ってから話を聞いた方が、そういう考え方もあるなと思ったりします。つまり、あらゆる見方や考え方があることに気づいてもらうことです。ネットは一方通行ですが、先生方と対話する中で、「そういう子育てに対する見方もあるのか」と気づきます。逆に皆さんも「お母さんはそういう考え方で子育てをしようと思っているのか」ということに気づきます。いろいろな見方や考え方があることにお互いに気づかなければなりません。

特にこれから働き方の多様性に適応する上で、国際化や人権の問題、就労の



あり方はワンパターンではありません。ですから、非正規雇用やパート、病気でも働きに行かなければならない人、言語や文化が異なる人、あらゆる人を保護者として受け入れて支援する前提として、いろいろな見方や考え方があることからスタートしなければなりません。保育をしている私たちにとって、保護者は敵ではいけないのです。いろいろな考え方がある上で、1人の子どもに対する育て方を擦り合わせて、うまく融合していくことです。初めから分かり合っているわけではなく、「そういう育て方をお母さんはしたいのですね。協力できることは協力しますが、うちの園はこういうやり方なんですよ」ということを互いに理解し合うことが大切です。

次に、じゃんけんをして、今度は負けた人から、皆さんの家のみそ汁についてしゃべってください。「私は食べない」でもいいですし、スープでもいいですし、具材でも、みその種類でも、だしの種類でも、何でもいいです。

—対話—

しゃべってみて分かるのは、同じブロックの人がいたとしても、具材や中身が違っていたり、赤だし、昆布だし、インスタントなどいろいろあるわけです。ということは、食事一つをとっても、みそ汁といえば、自分の家のみそ汁が相手の家にも出ているような気分でのいるわけです。結婚して同居してうまくいかなかったりするの、味や盛り付けの違いなどのちょっとしたことが原因だったりします。逆に言うと、いろいろな家があるということが、より豊かな人生になるともいえます。独りよがりではいけないのです。

お母さんに「給食でみそ汁を食べました」と言うのは結構ですが、保護者の中には「なぜ給食では食べて、私のみそ汁は飲まないの」と言う人がものすごく多いです。敵対心を持っている人もいます。しかし、被害者は、怒られる子どもです。「一生懸命作ったのに、家のみそ汁は食べない。それなら保育園の子になったら？」と言ってひがみます。「先生が家で手作りしろと言うから作ったのに、食べないではないか」と言ってきます。

この仲立ちをするのも皆さんの仕事です。大きな支援もあれば、毎日の生活ではこういうささやかなことが大事です。同じ日本の同じエリアであったとしても、具材が違うから食べないのかもしれないし、子どもからすれば同じメ

ニューなど夢にも思っていない。私たちが勝手にみそ汁と言っているだけで、味が違えば違うメニューだと思っ子もいるし、見栄えが違えば別物と思っている子もいるでしょう。たまたま保育園のみそ汁を食べているのだとすれば、薄味がちょうどいいのか、中に入っている豆腐が好きだからみそ汁が好きなのか、そこは皆さんがちゃんと通訳してあげることです。

お母さんのことが嫌いなわけではなくて、同じみそ汁でも味が違います。カレーにしても、お店のものと一緒にではないでしょう。字で書けば一緒ですが、子どもからすれば違います。だから、お母さんが悪いわけではないということを支援していかないと、「作るのは嫌」「それなら保育園に全部任せればいい」という気持ちになります。生活を共有していくことが家族として親子としてずっと大事なので、そういう小さいところでつまづかないように、いい意味の仲立ち、通訳をすることが皆さんの仕事でもあります。

小さな支援のようで、保護者にはとても大きなことです。そこを少し身軽にしてもらっだけでも子育てが随分と楽になり、保育園に対する見方が変わっていきます。小さな見方ですが、毎日の生活では大きなことです。

皆さん、ご飯を食べるときにどんな器で食べますか。どうぞ1分間しゃべってください。

—対話—

いろいろ考えてみてください。「なぜこの子は食べないのか」と思う前に、仮にコンビニ弁当を毎日食べてきた子がいるとすると、器は四角だと思っているかもしれません。または買ってきたおにぎりを食べていた子は、皿に入れてもらう習慣がないかもしれません。いきなりお茶碗と言われても、分からないでしょう。

あらゆる言語は、あらゆる生活活動から出てきます。ですから、家での生活のあり方が多様化している中で話をしていくことが必要です。買ってきたおにぎりなら、ごみが出るだけで器は要りませんが、「お皿に入れてあげてもいいのに」と思うかもしれません。また、皿に入れて食べる家もあれば、誰が洗うのかという家もあります。小さなところで随分と価値観が変わってきています。

「コンビニ弁当の何が悪いの」と思う人もいます。ですから、皆さんのカル



チャーや生活感を変えておかないと、批判するつもりはないのに、「晩ご飯はコンビニ弁当なの？」と言われた瞬間に多くの保護者は腹を立て、「私の家の晩ご飯に先生がなぜいちいち口を出すの」という声が非常に大きくなります。手作りのおにぎりがあるのなら、コンビニのおにぎりはあれだけ売れません。売れるということは家でにぎる人がいなくなってきたのです。または、にぎる必要がない。もっと言えば、ご飯をといで炊く必要がないのです。

専業主婦だから作っているというのは幻想です。働いているから作らないというのも幻想です。それは、それぞれの家の考え方であり、見方なのです。皆さんの子ども時代にままごとやお店屋さんごっこがはやったのは、お金があろうがなかろうが、買い物に行かないとご飯を食べられず、外食やコンビニがなかったときは家でおにぎりを作るのが当たり前で、子どもが小さいときはおにぎりが必須だったからです。子どもたちもその姿を共通の文化として見る確率が高く、砂場に行けば団子を作り、粘土を見れば団子を作り、おにぎりに見立っていたのです。

また、買い物についていけば、お店屋さんのイメージを持つことができるので、お店屋さんごっこをして遊んでいたのです。今、保育園に来ている保護者は一体どういうパターンの買い物をしているのでしょうか。しゃべっててください。

—対話—

保護者と対話するときにピンポイントでしゃべることに慣れないと、何も伝わりません。今はインターネットで買うこともできますし、宅配もあります。まとめ買いもあれば、コンビニで1日に必要なものだけ買うこともできます。大型冷蔵庫がはやった時代は過ぎ去って、冷蔵庫が要らない家庭も最近はあります。必要な分だけをコンビニに行行って買って来て、あとは飲み物だけ冷蔵庫に入れておけば十分な家庭です。食材から買っている家と、食材ではなく総菜や弁当を買う家があるというだけでも、皆さんが思う生活のあり方が随分変わってきていると思います。

一番怖いのは、皆さんに悪気がなく、批判しているつもりはなくても、その家庭のあり方を批判されたような誤解を与えることです。「この人は分かって

くれないわ」、「そんな偏見で見るつもり?」「ご飯を作らなければ親ではないような言い方をしないで」というものです。

今の保護者は決して家事能力が高いとはいえません。お風呂にしても機械が「お風呂が沸きました」と言う時代です。「お風呂の水がたまったかな」と子どもがお風呂を見に行く時代ではなく、子どものときから「お風呂が沸きました」という声を聞いて大きくなったと思ってください。トイレに行っても、勝手に水が流れるマンションもあれば、レバー式もあれば、手がざしもあれば、ボタンもあれば、生活習慣とされる排泄に関する事項もかなり多様化しています。

すると、バリアフリーのマンションで生活していた子どもが保育園でけがをしたとすれば、「なぜここに段差があるのか」と保護者は文句を言ってきます。家に段差がないのが当たり前の生活をしている保護者からすれば、保育園に段差があることは考えられないわけです。段差がある家に住んでいる人ももちろんいますので、環境が随分と違ってきています。

あらゆる生活環境が変わったことを前提に支援することを整理しないと、自分の育ってきた価値観のままに相手を見てしまい、自分のものさしで見ていることと同じになってしまうので、気をつけてください。

「サザエさん」は分かりますか。今やサザエさんも共通語ではありません。桃太郎や金太郎も最近通じなくて、「昔々あるところに」などは今の子どもたちは知りません。「まんが日本昔ばなし」のようなテレビもないし、最近は大人もテレビを見なくなり、インターネットで見ればいい時代になってきたので、チャンネル争いもだんだんなくなっています。すると、皆さんが知っているような昔話も、子どもは知らないし、保護者も知らないかもしれません。そういった生活文化の伝承がなくなってきました。

サザエさん家のタラちゃんは分かりますか。あの子は2～3歳ですが、家にいるだけで、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、小学生のカツオお兄ちゃん、ワカメお姉ちゃんがいて、近所のおじさん、おばさんがしょっちゅう遊びに来て、2～3歳なのに自分より小さなイクラちゃん存在を知っています。

今の保護者は、自分が親になるまでに自分より小さい子どもに出会っているのでしょうか。自分の子ども時代を記憶して、意識しているのでしょうか。または、赤ちゃんという存在を親になる前に見たことがあるのでしょうか。このこ



とについて1分間しゃべってください。

—対話—

4. 保護者支援の課題

いったん大きな枠組みで整理するならば、子どものことが分からないわけです。身近な子どもと接したこともないし、「赤ちゃんは何者？」という感じです。気がつけば大きくなって、自分は大人だと思っていて、私にもあんな小さいときがあったことに気づきます。スピード社会の怖さは、振り返ること、立ち止まることが許されない点です。メールやLINEは非常に便利ですが、どんどん情報が追いかけてきます。電話の時代は「今かけていいかな」「誰が出てくるかな」と思ってかけていましたが、メールやソーシャルネットでは夜中の2時、3時でも、好きなときにメールができます。

学生時代は特にそうですが、すぐに返事しなかったら無視されたり、スルーされたりして、仲間外れにされる危機感や恐怖感が非常に強いです。すぐに返事しなくてもいいのに、すぐに返さなかったことが重大事件になるわけです。電話はよほどのことがない限り、人間らしく寝ている時間にはかかってきませんが、そういうモラルが既に崩壊してしまっているのです。

ですから、保護者の方々は基本的に、ビジネスとしてもそうですし、日常生活としてもそうですが、非常にしんどいです。生活リズムそのものをなかなか捉えにくいのです。皆さんのところにお迎えに来るときも、なぜと思うかもしれませんが、携帯を操作しながらだったりします。すぐに返事しないと怒られるので、習慣になっているのです。トイレに行ったりすることだけが習慣ではなくて、LINEやメールを見続けることも習慣になっています。見ていなかったら、時代に遅れるわけではないですが、情報に遅れてしまいます。その辺も整理をしなければなりません。

(1) 子どもを軸とした課題解決への連携

生活環境の変化のなかで、子どもそのものが分からない、なぜ泣いているのかが分かりません。皆さんに気をつけてほしいのは、人間らしくなるのは就学前の保育の生活活動を通した育ちの保障です。生活体験がなければ育ってこな

いのです。

サザエさん家のタラちゃんは、家にいるだけでいろいろな人にしゃべってもらっているの、しゃべる動機づけがたくさんあります。しゃべりたくなるし、話も聞いているので、単語力もあります。聞こうと思わなくてもヒアリングが育っています。でも、もし誰もしゃべってくれなかったら、どうなるでしょうか。

今では笑い話のようなことですが、あるお父さんとお母さんがいました。子育てにとっても熱心な人で、一生懸命清潔に安全に大事に育てて2歳になりました。2歳になれば大体ぺらぺらとしゃべるようになると、本やインターネットで書かれています。2歳の誕生日を迎えた日、朝からビデオカメラを24時間態勢でセットして、最初の一言に「ママ」と言うか、「パパ」と言うか、決定的瞬間を待ち構えていました。ところが、しゃべりません。お父さんとお母さんはびっくりして、どこか悪いのだと思い、すぐに小児科へ行きました。小児科医は検査しましたが、どこも悪くありません。両親は「おかしいな。しゃべらないのです」と言うので、医師は何気なく「では、家ではどんなことをしゃべっていますか」と聞いたら、両親は怒りました。どう怒ったのか、しゃべってみてください。

—対話—

「この子がしゃべらないのに、なぜ私がしゃべる必要があるのですか」と言ったのです。「しゃべれないから医者に来たのであって、しゃべるのだったら来ないでしょう」という思いです。逆に言えば、2歳でしゃべろうと思えば、2歳までにどんな生活をしなければならぬかというのが人間教育です。これが保育と養護と教育の一体化と言われますが、人としてしゃべるようになる対話する力は、授業中に育つものではなく、毎日の生活の中で育つことです。

だけど、2歳になったら必ずしゃべると思っている人がかなり多いです。これは発達段階という言葉が非常に問題だと思います。1歳になったら歩くとも思っています。そのうちご飯を食べるようになるとも言われて、食べなければ腹を立てて、「なぜあんたはできないの」と思います。子育ての一番の難しさは、その年齢のある日突然にできるようになるわけではないことです。椅子に座ろうと思ったら、どうしますか。いつから椅子に座るようになったのですか。ど



うぞしゃべってみてください。

—対話—

ある日突然ではありません。座ろうと思えば、寝たきりでは駄目です。起こしてくれる大人が誰かいるわけです。これは保育も一緒ですが、家庭においても抱き起こしてくれる人がいないと、寝たきり赤ちゃんになります。私たちは筋肉隆々で生まれてくるわけではなく、出産しようと思ったら、柔らかくなければ生まれません。身体性は後から育つのです。抱き癖というほど誰も抱いていません。その単語だけがなぜか一人歩きしています。しつけという名の下で虐待死したり、養育放棄（ネグレクト）になったりするの、別に養育放棄しているつもりはなく、抱かなければいけないという方程式が成り立っていないからです。抱かないと、何が育たないか分かりません。特に乳児期はそうですが、全部ずれていくのです。

抱っこしないと体を支える背筋力や腹筋力が育ちません。腹筋力が育たないと、排泄の自律がうまくいきません。介護した方なら分かるのですが、今までちゃんと筋肉がついていたスポーツ選手であっても、少し寝たきりになれば、すぐに筋力は落ちます。寝たきりになると、内臓も循環器も悪くなり、排泄もうまくいなくなり、自分で起きられなくなります。体勢を自分の思うように主体的に変えることができません。

子どもの育ちには、大人の力が要ります。3歳未満は特にそうですが、起こしてくれる大人が要ります。これは、保育園なら保育の皆さんの仕事であり、家庭養育なら家庭の仕事です。逆に言うと、家にいたときに寝たきり赤ちゃんの状態、ご飯のときだけ椅子に座っていた子が保育園に来て、ちゃんと座れません。体がまだしっかりと支えられていないのです。

「1歳なのに」と言っても、「昨日までの僕の人生はほとんど寝たきりでした」と言うわけではないので、分かりません。「2歳なのに、なぜしゃべらないの?」と言っても、「昨日まで私としゃべってくれる人が誰一人いなかったのです」と言うわけがありません。しゃべろうと思えば、単語力がないと駄目なのです。しゃべるときに体のどこを使ってしゃべっているかお互いに見てみてください。

—対話—

あらゆる子どもを理解することは難しいのです。逆に言うと、保育の皆さんはどんな家庭から来たか、どんな育ち方をして、どんな生活をして、誰に関わってもらって、どんな関わりをしたかということ、かっよく言えばアセスメントですが、そうした子ども理解をイメージしておかないと、保護者に「しゃべりませんね」と言うときにも、保護者がびっくりしてしまいます。「家では静かに暮らしていたのかな。あまりしゃべっていないから、保育園に来たらびっくりして、うるさい国にやってきたのだと思っているかもしれないよ。お母さん」と言われたのです。だから、びっくりしているかもしれません。今まで機密性の高いマンションで暮らしていた子どもにすれば、保育園はうるさいです。嫌だと言って、泣き叫んでいるかもしれないし、適応するのに時間がかかるかもしれません。

昨日までミルクしか飲んだことのない子が、離乳期だからといって、いきなり塩分のあるみそ汁を飲ませたらびっくりして、食べたことのないものを口に入れられたと思うかもしれません。生活のあり方は皆さんが思う以上に多様ですから、受け入れたときに昨日までどんな暮らしだったかというイメージが要るし、お母さんとしゃべるときや寝るときはどんなふうにしていたかを聞きます。それはいい悪いの評価ではなく、事実を知るためです。「園を真っ暗にしようとして、ちょっとびっくりするかもしれないね」「寝るときはどんな所で寝ていましたか。お母さんが悪いのではなく、乳母車で寝かせる人もいるし、床に寝かせる人もいるので、保育園の生活に慣れるかどうかを聞いているんだよ」というふう聞きながら、「今日は布団に寝かせた方がよかったかな」と徐々に保護者が気づくことが大事なのです。

いきなりショック療法のように言うと、「そんなの聞いてない。知らないのに、なぜいけないの」と言う人もいます。乳母車を揺らしたら寝るけど、降ろしたら寝ないので、昼夜を問わず乳母車のままゆらゆらして寝かせている人もいるわけです。誰がいい悪いとは言えません。私たちは専門家として適切かどうかを判断することはありますが、いきなり批判すると、正しいことでも支援ではなくなり、指摘しただけになります。私たちが評価してもしょうがありません。

ただ、そのギャップの中で、「だから、このお母さんは子どもの欲求が分かっ



ていなかったのか。しゃべらなければいけないことも分かっていなかったから、この子はしゃべらないのだな。しゃべることがどういうことか分からないので、口を動かす姿を見せるようにしないといけない」と気づいて、子どもの育ちを保障するのが皆さんの仕事です。保護者の方々には逆に、何が理解できていないかを知った上で支援することが必要です。本当に子どもの育て方が分からなかっただけなのかどうかということです。単純な対応で、この格差がより広くなります。

（2）保護者自身を軸とした課題解決への連携

今の時代は、保護者自身が、子どもや赤ちゃんを見たことがない人がほとんどです。中学生、高校生が保育体験をしに来るのは、思春期に「君にも小さいときがあったんだよ。勝手に大きくなったのではなく、いろいろな人が手をかけて大きくなったんだよ」ということに、子ども自身に気づかせるためです。逆に言うと、未来の親になる人たちが「命はすごいね」ということに気づくためだと思ってください。

ですから、中高生が来ても遊ばせておくだけではいけません。この子たちに何を体験してもらうかということを皆さんも少し言語化する気持ちで、「お父さんやお母さんが家にいなくても、誰かがおむつを替えてくれたりして、今の君が大きくなったんだよ」と言ってあげて、命の大事さを知ってもらわなければならないし、子どもを産むのは大変なことだということも伝えておかなければなりません。

大事なことは、おむつを替えたりする場面をイメージとして持っておけば、実際に自分が親になって子育てするときに、頭の中にイメージがあるわけです。今の学生は子どもが裸で生まれてくることすら分かりません。皆さんには当たり前過ぎるので、分かりにくいかもしれませんが、子どもは裸で生まれてくるから服は持っていません。つまり、お金が要りますし、当然ながらミルクを飲みます。これも無料ではないことに気づかなければなりません。

夜に泣くので、泣くのを放ったらかしにできないなど、いろいろなことを想定する想像性が要るのですが、本当に未知との遭遇のような形で、産院から帰った瞬間にかなりしんどくなります。今は、保護者が産前から子育てのイメージを持つことが重要です。「生まれたら、こういうことが待っているのだな」と

いうイメージがあるのとないのとは随分違います。

未就園児が来られたりするときもそうですが、保育の場には子どもがいるわけですから、感染症の予防などいろいろなことがあります、「1年たったらあなるんだよ。今は大変だけど、来年の夏になったら、おたくの子どもさんも歩いているんだよ」というイメージを持つだけでも随分違います。その意味で保育は、子どものモデルがたくさんいる場所だと思ってください。

大阪府外のある市町村では、生まれる前に母子健康手帳をもらった日から、「出産まであと〇日です。体調はどうですか」、「そろそろおなかは張ってきませんか」などと毎日メールが届きます。生まれてからもメールが来て、「今日は1日目ですね。どうですか」、「100日目ですね。そろそろ離乳食ですよ」とずっとメール配信をして、子育て支援をしている自治体もあります。逆に言うと、情報をくれないと支援してもらったとは思えないのが今の保護者の皆さんです。メールで確認するタイプの方々ですので、同じ内容でも100のことをしゃべるより、メールで確認した方が身近な支援という感覚を持ちます。

皆さんもメールでしなさいとは言いませんが、今の保護者の感覚とすれば、メールで来た方が受け入れやすいのです。先生に呼び止められると、学校教育で注意される気分になります。「呼び止められた=怒られる」という感覚を持っている人が多いです。ですから、「しんどい」保護者ほど呼び止め方に気をつけないと、初めから拒否されます。話の持っていく方に気をつけないと、最初に怒られると思ったら、何を言っても怒られているとあってしまって、耳に入りません。

保護者が学校時代に先生とどういう関係にあったかというのは分かりません。先生との関係が良かった人はともかく、嫌な思い出のある人は、保育園の先生といっても呼び止められることが嫌だと思う人もいます。「子どものことなのに」と思うのですが、身についた学校生活の癖は抜けにくいと思ってください。

そして、もう一つ気をつけなければならないのは、保護者と向き合うときには大人と大人であるということです。子どもにとっては先生ですが、保護者にとっては先生ではありません。大人と大人が向き合って話をするのです。子どものことについて、皆さんは専門家として、お母さんはお母さん、お父さんはお父さんの立場で、専門家と家庭養育をする側が向き合って話すスタイルでな



ければ、非常に上から目線になって、けんかになってしまいます。

もし皆さんが医者に行ったとき、皆さんが直接の患者であったとしても家族の相談であったとしても、以前なら「手術しないと駄目ですよ。この薬を飲みなさい」という言い方でしたが、最近は「決めるのはあなたです」という言い方になりました。かつては医者の言うことは聞かなければならない部分が多かりましたが、この頃は説明責任が求められます。医者にも都合があるけど、患者にも都合があるし、手術後どうなるかによっても思いが変わってくるのと同じで、子育てにおいても上から目線にならないことが非常に重要です。

また、家事能力は全体的にアップしているわけではなく、どちらかといえばトーンダウンしているとイメージした方がいいと思います。

もう一つは、自己解決力が非常にしんどいことです。コントロールできない、我慢できない人がとても多いです。我慢しなくてもいい時代になっているので、皆さんが思う以上に我慢しにくいのです。だけど、子育ては我慢しなければならぬことのオンパレードだと思ってください。

（3）保護者を取り巻く環境を軸とした課題解決への連携

ここからが関係機関との連携の話になります。子ども自身のことは皆さんがいつも保育で向き合っていることであり、一番得意な部分です。保護者自身のことにも向き合っています。しかし、一番見えないのが保護者を取り巻く環境です。家族全体の社会的な位置づけやあり方によって、結果として子育てに大きく影響します。

介護であれば、家事援助をしてあげれば介護はしやすくなるのか。しばらくデイサービスに連れて行ってあげれば家族はほっとできるのか。おむつを替えることだけをしてあげればいいのか。それともカウンセリングをしないと家族が心を病んでしまって、介護はこれ以上無理と思っているのか。何をすれば、介護されるおじいちゃん、おばあちゃんも家族もバランスが取れるのかを明らかにするのが介護計画です。

子育て支援もそういう時代にならなければならなくて、家族の協力が得られているのかどうかについて、かなり思い込みがあります。おじいちゃん、おばあちゃんが同居している、あるいは近所に住んでいるから、支援してもらえるだろうという思い込みはやめてください。おじいちゃん、おばあちゃんといっ

でも、今は年金受給率も減り、働かなければならない時代となり、孫の世話で一生終わろうと思っている人も少なくなりました。一緒に住んでいるから世話になりたいと思う人も減り、2階と1階にいても、顔を見ないような関係はいくらでもあります。

それがいい悪いではなくて、おじいちゃん、おばあちゃんがいるとしても、協力が得られるとは限らないのです。助けを求めればいいのに、求めるとも限らないのです。また、夫と妻の両方とも、そばに助けてくれるおじいちゃん、おばあちゃんがない場合もあるでしょう。孫が病気になれば交通費を使って飛んできてくれる人もいますが、気持ちは行ってあげたいけど交通費を使ってまで行かないという人もいるでしょう。かなり孤立している人が基本的に多いです。

ネットに相談者がいたとしても、対話して相談する人がいないので、うまく解決できません。ストレス発散で、聞いてもらってほっとする部分が皆さんの時代より減っています。「話しているうちに解決できた」「聞いてもらってすつとした」という部分が随分減っています。メールを一生懸命打てば打つほど、気持ちは鬱になり、内向していきます。声を出すとストレスを発散できますが、メールは中にのめり込んでいくので、より精神的にしんどくなります。

経済的な悩みとしては、子どもの年齢とともに給料が上がっていくような先行きの見通しはほぼ玉砕しています。非正規雇用がどんどん増え、契約社員が増え、大手企業であってもいつつぶれるか分かりません。40～50歳でもいつリストラに遭うか分からない非常に先行き不透明な時代です。ですから、子どもを生んで、こういう生活をしようという計画がなかなか立てにくい時代に入っています。基本的にほぼみんなそうです。二人で働いていて、ようやく食べていけるという人も多いです。

一方で、学生時代は経済的に豊かだった人も多いです。アルバイトでお金を手に入れることができます。でも、実際に子どもを育てようと思って働くとき、アルバイトは給料が安く感じます。学生時代はアルバイトのお金を全て自分のために使っていたものが、結婚して、子どもができ、それを分配することは非常に保護者にとってストレスです。分けることが非常にしんどいわけです。

経済的なことは皆さんが太刀打ちできる領域ではありません。経済的にしんどい場合、役所のどの窓口にも相談に行けばいいのかという関係機関とのつなが



りの情報が必要です。役所のことは皆さん意外と知らないなので、こういう窓口があるということは、個人に伝えるのではなく、全体として掲示するなどします。

ただし、入り口にポストのようにたくさん並べているところがありますが、ほとんど誰も見ません。文章が書かれた紙を見る習慣がなかなかないからです。今はペーパーレスの時代なので、チラシを見ることはなかなか難しいです。そうすると、図式化したものを貼らなければなりません。いかに文字を少なくして図式化するか、「詳しくはチラシのピンクを見よ」と書いておかないと、いきなりチラシを見ても、学歴や学力に関係なく、意味が分からない人がほとんどだと思います。分かりにくい時代に入っているので、「お金に困ったら、窓口はここ、チラシはこれ」として、「詳しくは〇〇にどうぞ」としておかないと分かりません。

病気になったときの窓口や夜間救急を示しておくことも重要です。普段から日常的な支援をきちんとしておかないと、何かが起こってからの支援は当然必要ですが、標準的にどの人もみんなしんどいですから、そういうつなぎをしてください。お母さん自身が精神的にしんどいときは、無料カウンセリング窓口につないで、そこからまたどこかの病院につなぐといいですが、「カウンセリングに行った方がいいよ」と言われた瞬間、「なぜ私に言うの?」となります。ですから、まずは普段から「しんどいときはここに行こうね」というアプローチをして「誰でも行ってもいいから、1回行っておいで」ぐらいにしておかないと、なかなか難しいと思ってください。

相談して本当に「しんどい」人がいたときは、直接的に「ここに行ったらどう?」と言います。行くかどうかは別で、あくまで大人のことなので、情報提供することはあっても、無理やり引き連れていくことは、犯罪にでもつながることではない限りは無理です。ただし、窓口のつなぎ、関係機関との連携については、少なくとも自分の園がある市町村にどういうものがあるかということは園全体で共有し、マップにして貼っておくぐらいしないと、知っている人は知っているけど、知らない人は知らないことになり、知らないから全て担任が一人で抱え込むことになってしまうので、そうならないようにお願いします。

子どもがしんどいケースも、お母さんがしんどい場合も、大抵はその背後に支援すべきことがあります。会社との関係がしんどかったり、夫との関係がし

んどかったり、妻との関係がしんどかったり、おばあちゃんとの関係だったり、家族に介護が必要な人がいたり、障がいを持っている方がいたり、外から見えない部分で支援しなければならない部分が二重三重にあります。少子化によって、1人当たりの抱え込む分量が今まで以上に増えていきます。ぜひそういうことを覚えておいてほしいと思います。

もう一つ、「しんどい」子どもがいた場合は、作業療法士や理学療法士と連携することもあります。特に子どものことで支援を要して外から臨床カウンセリングなどの人に来てもらう場合には、「どうぞ見てください」と丸投げするのではなく、保育として皆さんが見えて気づいている部分と、外から来た臨床心理士が見て気づく部分をきちんと融合していかなければなりません。皆さんはプロなのだから、皆さんが気づいている部分は、違う目からはどう見えるかを擦り合わせしていくことが非常に大事です。

保護者のことにしても、外からもカウンセラーが来たら、皆さん自身がカウンセラーに、「こういうケースはどう思いますか」と相談しながら、一人で判断せずに、「その保護者を一緒に見ましょう」、「カウンセラーさんの方から言ってください」というふうに、第三者の方に来ていただかなければならない時代に少しずつ入っています。少なくとも、一人で抱え込まないようにお願いします。

5. 保育の長時間化

保育の時間が長くなっています。今、園内で最も長い保育時間の子どもで何時間ぐらいでしょうか。しゃべってみてください。

—対話—

保護者支援といろいろ言いますが、保育にいる子どもたちの時間がものすごく延びています。保育所を利用している子どもたちは、少なくとも8～12時間、保育所にいる時代になっています。ということは、家ではほとんど寝るだけです。それは、0歳から利用している子どもなのか、認定こども園になって3歳ぐらいから入ってくる子どもなのかによって、親子が一緒にいる時間の長さ、子育てをしている感覚は一緒ではないことも影響しています。



特に気をつけなければならないのは、子どもの機嫌がいいのは、どちらかといえば皆さんという時間です。皆さんが見ている子どもと、家に帰ってからの子どもは一緒ではないことも知っておかないと、家では疲れた者同士です。保護者は仕事が終わって疲れています。子どもは昼間に先生と機嫌よく遊んだかもしれないし、さんざん怒られたかもしれませんが、眠い時間になってから帰ります。かつて夜7時は夜間保育の時間に該当しましたが、今は保育をするのが当たり前の時間になっています。

すると、保護者の支援といっても、家に帰ってから一緒にいる時間の支援なのか、昼間預かっている時間の支援なのかを少し整理しておかなければなりません。お母さんが必要だから保育所で預かっているわけですが、預かっている時間の中でお母さん自身が心を病んでいてしんどいから、もっと預かってあげないといけないのか。昼間にこれだけ預かっているのだから、少しはほっとするようになったのか。

今はできるだけ長時間・長期間、預かるようになっていきます。それでもしんどいということは、大人の生活のあり方が変わっているのです。皆さんが思う以上に、人間は欲張りであり、まだ足りないのです。夜7時まで預かってくれる時代になったのは最近のことです。乳児から預けてよくなったのも、この5年ほどです。それが当たり前になったとき、もっと預かってほしくなり、もっと支援してほしくなります。それがいい悪いと言うわけではなくて、そういう時代になっています。

その中で私たちが考えなければならないのは、子どもの体験としての育ちを保障することです。家にいる時間が短いということは、家庭養育における生活体験が少ない子はそれだけ育ちの保障が難しい部分があり、皆さんが思う以上に親子関係も、子ども理解も、保護者は分かりません。保育所では笑っていても、家では笑ってなくて、泣いてばかりかもしれません。それは決して苦情ではなく、対極した生活の中で見えている子どもの話を保護者はしています。

昼間プールに入って疲れれば疲れるほど、家に帰ったら寝ないし、疲れているからぐずるかもしれないし、それを見ている保護者の声と、昼間水遊びをして楽しかったと思っている私たちとは対峙しています。見ている子どもの姿が一緒ではないことにお互いに気づかないと、困っているのは子ども自身なので、これだけ保育時間が長くなってきたときに、ぜひ考えていただきたい課題だと

思います。

6. 就学に向けた地域の関係機関との連携

就学に向けて「しんどい」子どもの場合、いろいろな関係機関との連携の支援は市町村によって異なるので、どういう支援があるか、少し教えてほしいと思います。こういうことを踏まえて、保護者がこれだけ育てるのがしんどくなってきた中で、私たちは保育において、何を人間としての育ちに向けて保障しなければならないのでしょうか。1分間しゃべってください。

—対話—

私たちの仕事は、保護者を支援することと同時に、保護者がしんどくなればなるほど、この時代の子どもの育ちをどう保障するのか、保育が長時間になればなるほど、保育の場にいる中で子どもの最善の利益として最低限、何を体験しておかなければならないのかを追究することです。今の家庭はかなり多様化し、きちんと育てられない親も増え、地域にしても子どもだけで家の前では遊べない、いつ誘拐されるか分からない時代です。本当に子どもだけで外に出たり、子どもだけで自転車でお買い物に行ったりするのは難しくなっています。

これからますます長時間・長期間、乳児期から預かるようになればなるほど、保育の場において人としてどういう体験が要るのか、何を育てておかなければならないのか、今すぐは無理でも卒園するまでにこんな子になってほしいという方向性を、皆さんが持つておかなければなりません。これは「幼稚園教育要領」の改定でも出てきていることであり、到達目標ではなく、方向性です。つまり、保育の皆さんの保育目標、子ども像です。人としてどんな子どもに育てようと思っているか、人として何が大事かということです。

そのことを考えるときに、文化的な背景をきちんと理解しておかなければなりません。文化は何も国際性だけではなくて、しゃべってくれる大人がたくさんいる生活文化から来た子どもと、親がパソコンで忙しくて静かな環境で育った子どもでも異なります。「うちの子は静かでやりやすいわ」と思って保育園に来たら、先生から見ればしゃべらない子に見えるかもしれません。昨日までお母さんはパソコン作業で、子どもは後ろを向いていて、背中合わせで静かに



遊んでいたという子が入園するかもしれません。それが文化的な違いであり、子育てに直接表れます。

そのとき、「お母さん、家でなぜしゃべらなかったの」などと言わないでください。言ったところで、タイムマシンに乗ってもう一回やり直すわけにはいきません。私たちはその事実を受け止めながら、保護者にも少しずつ、子どもは勝手にしゃべるわけではないことを知ってもらいます。しかし、子どもの育ちは待ってくれないからといって、保育の中で「みんなしゃべっているじゃない。おかしいよ」とは言わないでください。子ども理解が必要です。

昨日までは大人がしゃべらない国からやってきた子なのだから、「だんだんしゃべる文化に慣れていってね。しゃべるのはすてきでしょう。しゃべりたくなってほしいな」と思ってください。そのところは裏表一体のような感じですが、保護者がしんどければしんどいほど保育の役割があり、しんどくない保護者にはきちんと伝えていかなければならない部分があります。その点を整理していってほしいと思います。

7. 入園から入学直後までの連携のあり方

もう一つの課題は、皆さん自身の保育の専門性を保護者に伝えながら、保護者をどう支援するかということです。保護者は保育の皆さんのことを、とても忙しくて大変で、お世話になっていることはおおむね分かっています。

この間、あるお父さんはこう言っていました。「息子が20歳になる今日の今日まで、保育園にお世話になったと思っていたけれど、ご飯を食べるのは自分の子どもの実力だと思っていた。ところが、保育園に取材に行くと、勝手に食べられるようになったわけではないことが分かった。保育園の先生からスプーンの持ち方を教わり、口に運んでもらいながらだんだんと自分で持てるようになり、こぼしたら拭いてもらい、手間暇かけてもらって、うちの子は自分でちゃんと食べられるようになった。トイレに一人で行けるようになったのも、保育園の先生が手間暇をかけていたからだということに気づいた」

しかし、私があらためて思ったのは、皆さんの仕事の意味は子育ての大切さを伝えることであるにもかかわらず、本来子育てではこれだけ手間暇をかけて人間らしく育てているのだということが、保護者の多くに伝わっていないことです。先ほどのお父さんではないですが、何とかなると思っていることがたく

さんあると思うのです。

皆さん、空中に絵を描いてみてください。頭の中に顔でも描いてみてください。そのとき、どこの身体性を使いますか。どうぞしゃべってみてください。

—対話—

絵を描こうと思ったら、まず手が動くかどうかです。丸を描こうと思ったら、手首が自由になるかどうかです。逆に言うと、なぜ保育はしょっちゅう絵を描いたり、紙をちぎったりするかというと、子どもの手が発達するからです。特訓やリハビリではなくて、ちぎったり貼ったりしながら、気がつくと手が自由に動くようになります。もし寝たきり赤ちゃんでそのまま放置されていたら、ネグレクトの子もそうですが、鉛筆を持って今日から字を書こうと思っても書けません。丸を描こうとしても描けません。それは能力ではありません。腕を動かす体験が必要であり、ある日突然、手首が柔らかく動くようになるわけではないのです。それが育ちの保障です。

皆さんの子ども時代は日々の生活が不便だったので、気がつけば体を使わざるを得ないことがたくさんありました。水道の蛇口を回したり、コンビニもなかったので、みんなでご飯を食べる機会が多く、口を動かすのをまねします。電話があればダイヤルに指を突っ込んで回しました。ドアがなくて、障子を開ければ、手を動かすまねをします。ふすまを開け閉めする遊びをすれば、身体性は勝手に育ちました。段差があれば下りながら膝を曲げるという習慣の身体性が育ちました。バリアフリーなら、膝を曲げなくても歩けます。段差があれば膝を曲げざるを得ません。単純なことで育った部分が、今の時代では意識しなければ育ちにくくなっています。

子育てを支援することが皆さんの仕事の要です。「なぜこんなものができないのか」、「あのお母さんだから仕方ない」ではなくて、人が人になることはそんなに簡単なことではないことに皆さんが専門家として気づき、昨日までの生活と保育園に来たときのギャップがあるので、少しずつ適応させていきます。その結果、「絵が描けなかった」ではなくて、「お母さん、初めて来たときは手首が硬くて点々しか書けなかったのに、毎日こうして遊んでいるうちに、今日は丸になったよ。それだけ手首が柔らかく育ったのだよ。あなたの子どもは育つ



ていますよ」という返しが大切なのです。絵を描くことにはそういう意味があると初めて気づけば、心ある保護者は家でも描かせようと思うかもしれません。それが無理なお母さんたちであったとしても、保育園の先生はそんなふうで育ててくれているということに気づきます。

「しんどい」お母さんの子どももしんどいことが多いので、どうしても注意することが多いです。うまくいかなかった報告が多くなり、育てたなくなり、しんどければしんどいほど、お母さんが病んでいけば病んでいるほど、家族がうまくいっていないほど、「あなたの子どもはこうして育てているよ」と言ってもらう方が生きがいになるかもしれません。産んでよかったと思うかもしれません。

この反対の発想を持っておかないと、お金もなくて、精神的にもしんどい上に、保育園に迎えに行ったら「うちの子、また悪いことをしたらしい。また先生に注意される。産まなかったらよかった。保育園に迎えに行くのも嫌だ。先生の顔を見たくない」と思ってしまったら、私たちは支援しているのに、結果的には支援ではなくなります。遠ざけてしまうことになります。

そうならないように、「しんどい」子どもは皆さんから見れば育てていないかもしれませんが、たとえ1cmでも育ったと思ったときは、「前よりも育ったよ。初めて来たときは、絵本を見ようと思ってても絵本を投げかけていたのに、絵本を自分で読もうとするようになったよ。すごいね、賢くなったよ」と、できるだけその子を産んでよかったと思えるように、1個だけでもいいから見つけるのです。褒めなくてもいいから、変化したことを伝えるのです。

そのためには記録があった方がいいです。先生方のおかげで、初めて来たときよりも必ず育っています。でも、最初のときの記録がなければ変化が見えませんし、周りの子はもっと大幅に育っていくので、より育っていないように感じます。でも、初めて来たときのメモを少しでも残しておけば、まだまだ大変だけど、この子にすれば育ったという部分が見えてきます。「最初は紙を見ても、ぼいと捨てていたけど、この頃はぐちゃぐちゃしなくなった。絵を描くという意味が伝わってきたよ。ちゃんと記憶したということでしょう」。絵を描こうと思ったら、思い出す作業をします。つまり、記憶している脳を使っているわけです。ということは、ちゃんと考えたり、思い出したり、思考力を使っているわけです。手だけを使う表現ではありません。

また、色というものが世の中にあって、クレパスの使い方や色は何かを認知するようになります。「何色が好き？」と聞いても、意味が分からないと思っていた子が、3か月後に「赤色が好きと自分で選べるようになったよ。クレパスは絵を描く道具ということをちゃんと分かったよ。分かるのに半年かかったけど、分かったよ」というふうに話をします。そのことを皆さんも知っておいてほしいし、保護者にフィードバックすることで、子どもを育てるとはこういうことであり、人間はそんなに簡単に人間らしくなれないということを伝えないと、ネグレクトはますます増えます。

皆さんは絵本を見るとときに、体のどこを使っていると思いますか。おもちゃを持っているときには何が育っているのでしょうか。逆に言うと、家におもちゃがなかった子はどうでしょう。家に1冊も絵本がなかった子はどうでしょう。そのことを考えてほしいのです。最近、おもちゃが売れず、おもちゃ屋さんがどんどんつぶれています。おもちゃや絵本が一つもない家がいくらでもありません。

一方、Facebookなどのソーシャルネットがどんどんはやっています。あるとき、私の知り合いが、2歳の三つ子の男の子を私の学校に連れてきました。男の子と聞いた瞬間、きつと走り回るし、騒ぎまくるだろうと予測し、危なくならないようにしよう、おもちゃを用意しておこうと考えました。しかし、パパである友人は「全然大丈夫」と言います。何が大丈夫なのだろうと思ったのですが、その子たちは私とパパが1時間ほどしゃべっている間、一度も顔を上げたり、立ち上がったたり、うろろしたりしませんでした。一言もしゃべらず、けんかもしませんでした。なぜなら、iPadというとても便利な道具を持ってきたからです。

そういう家庭に私たちは何と言うのでしょうか。「そんなのはやめておけ」と言うのでしょうか。私は思わず、「高かったですよ。誰に買ってもらったの」とどうでもいいことを聞いてしまったのですが、「おじいちゃんが買ってくれた」と答えていました。「これからは機械の時代だ」と言って買ってくれたそうです。

買ってもらったのはいいのですが、彼は「3人の子どもたちは最短距離で賢くなる。こんな賢くなる道具はない」と言いました。三つ子が生まれて、大変だと思ったけれども、iPadのおかげで絶対に動かないし、しゃべらないし、け



んかしないそうです。しかし、動かないのは困るし、しゃべらないのも駄目だし、せっかく3兄弟なのに、けんかしなければ人間関係が形成されません。でも、賢くなると言うのです。

そして、ずっと座っているということは、2歳でびよんびよん飛び跳ねなければならぬのに、体は硬くなります。また、言語が最も育つ時期です。3人だからしゃべることはあるはずなのに、しゃべりません。その代わり、けんかもしません。子育てする保護者からすれば、この道具のおかげでしつけは大成功、ついでに賢くなって、けんかはしないし、育てやすく助かると言われたら、返事のしようがありません。これが家庭養育の現実です。

狭いマンションで走り回ったら近所迷惑になるかもしれませんが、子育てで支援としては外に出てきて走ればいいのです。家では無理だけど、広場でも子育て支援センターでも保育園でもいいので、広い所に来て、人との関係を作ればいいのです。「おもちゃは不思議だな。これは何だろう」と思ったときに頭を使うのであって、タッチパネルは条件反射であり、思考力を使っているわけはありません。そうして新しいものの見方に気づきます。

触れることで手も育ちます。指しか育っていなかったら、物を持ったりつかんだりできません。腕の筋力が育たなければ、顔から突っ込んでけがをしますし、ぶら下がったら手が抜けますし、椅子を持っても落とします。ドッジボールをするときも、ボールがつかめません。文部科学省は運動指針まで出していますが、就学前は運動ができる・できないではありません。体が育たずに、いきなり体育で頑張ろうとしたら、ますます運動が嫌いになります。できない自分を見つけるだけです。就学前はできる・できないではなくて、人間としての筋肉をどう育てるかという身体性がとても大事です。

体は動くだけではありません。しゃべるときには、顔の前に舌を使います。今の保護者は「いないいないばあ」や「べろべろばあ」の遊びを知りません。もしかしたら私どもの卒業生も含めて、自分もしてもらってこなかったかもしれません。別に親でなくても、誰かがしてくれることで、しゃべる前に舌を動かす筋肉が育ちます。

ご飯を咀嚼する前に、舌を動かさないと食べられません。高齢化すると舌の動きが悪くなり、唾液の分泌が悪くなります。それで、上手にご飯が食べられなくなり、何を食べてもおいしくなくなります。子どもは逆に、これからいろ

いろいろなものを食べるために舌が自由に動くことで、うまく咀嚼でき、噛むことでおいしい味が分かります。そうしていろいろなものを飲み込みながら、喉の筋肉の収縮性を育てていきます。これが離乳食の時期です。

そこを保護者にきちんと伝えないと、「食べない＝好き嫌い」とたたかれたら、もうやめてという感じになります。ちゃんとその意味を伝えていく専門性が、これからの子育て支援に最も必要です。意味があると分かれば、8割ほどの保護者はかなり協力します。ご飯をほったたにためていると、「何か私の料理に文句あるの」などと言ってしまいます。

「なぜしゃべれないの」と聞かれて、「舌が動かないのに、しゃべれないわ」とは言えません。もっと言えば、表情筋の動きを豊かにすることが大切で、笑う人間にします。楽しむことの基本は笑うことです。笑うことが皆さんの仕事ですが、笑う人間に会っていない子は笑えません。人間のモデルがいて、まねをして、私たちもどこかで見聞きしたことをまねして生きています。人間に生まれた子どもは大人を見聞きして大きくなります。そのときにいい気持ちの大人を見れば、そうなりたくなりますが、見たくない大人に出会った子どもはなりたくないと思うので、自分で成長をやめるので、発達していきません。たたかかれてきた子は見たくない、聞きたくない、触れられたくないばかりです。だから、育ちは緩やかになります。児童養護施設や乳児院に行くときよく分かります。

皆さんは、楽しむことを仕事にしています。「いい気持ちよ。楽しいよ。面白いよ」と言えば、子どもがきらきらして、育つためにいろいろな活動を通して楽しんで、もっと夢中になります。夢中になるということは吸収するということです。まねをする上でいろいろな生活がとても大事なわけですが、今はその生活そのものが変わってきました。

ままごと遊びも、お店屋さんごっこも手本がないので、絵本で見せたり、皆さんが作ったものを子どもに用意したりすれば、やりたくなる動機づけを与えられるかもしれません。散歩に行ってお店をのぞけば、やりたくなるかもしれないし、基本的な生活体験の活動がないと、「やりなさい」と言っても、記憶にないものはまだできないので、ごっこ遊びはうまくいきません。

「これ、下さい」、「いくらですか」というやりとりもそうです。世の中にお金があることもそうです。あらゆることを言語として知り、生きていくときに



世の中には何があるかを知り、気がつけば体が育つのが就学前の遊びや生活のすごいところです。皆さんは、そのようなすごい仕事をしているのです。本当は家庭養育もすごいことをしてきたのですが、便利になり過ぎて、この頃だんだんその意味が分からなくなり、逆に育ちにくい時代になっています。多様な生活の多様な子どもを理解し、それをもってカリキュラムをつくるときに、保護者がしんどければしんどいほど、支援する保護者が多いほど生活体験がないので、保育の中でどう擬似的体験するかを考えてください。

幼児教育の5領域も本来そういう意味で書かれています。お店屋さんごっこや絵を描くこと、水遊びは全て、その水面下にいろいろなもの見方や考え方があります。水遊びは水だけではなく、「水」「冷たい」「きらきら」といった言葉もあります。3～5歳になって、水遊びをどこかで体験しないと、小学校でいきなり知識として習うこととは違います。特に幼児期は、先生方がちょっとおいておいてくれれば、あとは「あれか」ということにつながることはばかりだと思ってください。砂遊びも同じように小さなことがつながっていきます。

小学校との段差のことはお話ししましたが、この体験が豊かでなければ、結果としてこの段差はうまく乗り越えられません。水遊びの中でも、「水って冷たいな」「不思議だな」「きらきらしているな」「上の方は熱くて、下は冷たい」という気づきそのものは、日々の生活です。「手を洗うときの水道も水だった」「雨もそうだ」ということにどう気づくか。保護者を支援しなければならぬ家庭ほど、そういう言葉や体験の豊かさがありません。生活に追われるとは、そういうことでしょう。

豊かであることは、小さな生活の中でいろいろな言葉を見聞きしていることです。保育の質や日々の生活が単調にならないためにも、カリキュラムが重要です。同じことの繰り返しに見えますが、季節感であったり、言葉だったり、人によっていろいろな考え方があることに気づくことも生活体験の豊かさになっていきます。保護者支援と保育の質は裏表のことなので、ぜひそのことを持ち帰ってほしいと思います。